

Title	P・ホグリーフ著 トマス・モアをめぐる人々
Sub Title	The Sir Thomas More circle, a program of ideas and their impact on secular drama, by Pearl Hogrefe
Author	渡辺, 和一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.1 (1961. 1) ,p.66(66)- 71(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19610101-0064
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610101-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

的諸関係のなかで躍動する指導者の立場を客観的に批判し、軍国主義ドイツの崩壊後、ドイツ革命の失敗、その後の短い幕合いの期間に登場したワイマール体制が、何故にヒットラーの第三帝国への途を閉くに至ったか、この問題を、すでにこの一九一八年から一九九にかけての変革の過程の歪曲化のなかに、もっとも公式的でない形において求めていることは注目されねばならない。

(飯田 鼎)

P・ホグリーフ著

『トマス・モアをめぐる人々』

“The Sir Thomas More Circle

A program of ideas and their impact
on secular drama”

by Pearl Hoglefe, 1959

I

トマス・モアとその友人たちを、単にヒューマニストの群れとしてではなく、著者ホグリーフのように Sir Thomas More Circle とか “F. More Group” としてとらえることには、積極的な便宜がある。つまり大体一五〇〇年を境にして、イギリス・ルネサンスに

は大きな変化がみられ、それ以前はイタリアに遊学してきた Cyriac, Linacche, Coler らによって、漸くイギリスにルネサンスの火が点じられた時代であり、その時モアはそれら先輩の影響をまともに受けるのである。だが一五〇〇年以後になると、英国内でルネサンスの感化を受けたモアたちの世代が、一人前に成長してヒューマニストとして活躍することになる。いわばルネサンスがイギリスに深く根ざし勢よく芽生えてくるのである。「モアをめぐる人々」とは、このようなイギリス・ルネサンスの局面を的確に示しているものと言えよう。

更に、このグループに属する人々の活動をモアの没年である一五三五年頃までに限って考えているわけであるが、モアの死とともにルネサンスのはなやかさは消え失せたとみてよいので、その意味では「モアをめぐる人々」というとらえかたは好都合である。しかし、モア自身の作品の上にも、「ユトローピア」を頂点として、以後ルネサンスの色彩は影をひそめ、宗教改革にもなう宗教論争が多くなり、必ずしも同日に論じがたい。このことは他の人々にも言えることであるが、著者ホグリーフはむしろ意識的にその面の変化を切りすてようとするふしがある。それは「モアをめぐる人々」をルネサンス中心に考えるにはよいとしても、社会的変革に対応する彼等の姿をとらえるには、大きな欠点となっていることは争えない。

要するに本書は、モアを中心とするイギリス・ルネサンスの解明に主題をおくものであるが、従来の研究が概ねトマス・モアだけ

とりあげるにとどまり、その周辺への探究がなおざりにされがちであった。たとえば「ユトローピア」に描かれたモアの社会改革案も、必ずしも当時のヒューマニストにとってかけはなれたものではなく、むしろ同時代者のいだいていた思想との関連のなかに理解されねばならないものである。ホグリーフの労作はモアとその友人たちの共通の理念を明らかにしようと試みたものである。

II

本書の内容は、第一部「改革案の諸理念」(Ideas: The Program of Reform)と第二部「それら諸理念の一般戯曲への影響」(The Impact of their Ideas on Secular Drama)から成り立つ。しかも各部とも同名の六章に分れているが、その章別がいわばその諸理念を示しているから、次に掲げる。

- Nature and the law of nature
- The bases of true nobility
- Religious reform
- Law and government
- Education in general
- Education of women: love, marriage

即ち第一部では、これらの諸分野で、モアやその仲間たちが受けついでた伝統のなかで、いかに働きかけ、どのような作品を残したか、を吟味することによって、彼等のいだいた改革への理念をつきとめ

ようとする。第二部では、今みいだされた諸理念が、モア・グループの人たちの手になる戯曲のなかに、どのように現われているかを明らかにしようとするものである。

ところで、これら理念相互の関係はどうなっているであろうか。第一に重要な概念として、自然と自然法の思想がとりあげられる。モア・グループの人々にとって、それはすべての思想の基礎をなすものであった。彼等の判断や行動の基準は、そこに求められた。だがそれにもかかわらず、彼等の言う Nature の意味は、多様で決して単一ではなかった。古代や中世の伝統をそのまま受けついでもいたし、敢えて独自の意味を主張するものでもなかった。ある時は宇宙の理法を意味し、ある時は神の秩序を意味した。また人間に内在する理性を示すものでもあったが、一方では物理的な自然界をさす言葉でもあった。概念としては一向に新しい発展をとらなかつたが、古い権威ではなく Nature を行動の指針として尊重したところによって、彼等の関心も Nature の語義のように多角的にひろがっていった。そしてそのような自然の法を認識する主体として、あらためて人間の尊厳や意志の自由の意義が確認された。

かくして、人間の真実の高貴さは、自然の法を学ぶことによってのみかち得られることになる。家柄や財産のいかんは、人間の尊さとは無関係なものとなる。そこに貴族主義の排斥と、学問や教育によって何人も真実の高貴さを実現することができるという信念をみいだすのである。それ故、世の指導者たるものの資格として、真実

の高貴さが要求されることになる。

このような価値判断をもって、聖俗の権力に向けて批判と改革の目をむける。宗教上の改革については、謙虚に聖書の研究をすすめることから始められ、素朴な信仰が説かれ、教会の形式主義的な虚飾や権力争いが批判される。次に批判の対象になるのは、法と政治である。モア・グループの人々は、王制に反対するものではないが、国王が真に国王となるため、学問を修め支配者の義務と正義を知らなければならぬ。そして法律は王といえども守らなければいけないし、その法律は神の法に一致するものでなければならぬと説く。

以上のように改革案の理念となつてくるものをみてきたが、そこに一貫しているのは教育による改革という考えであった。ヒューマニストたちの社会改革案は、実質的には教育改革案といふべき性質のものだった。それはキリスト教とギリシャ・ローマ古典とを調和した世界を実現しようとするものであったが、その導きをなすのは、自然という理念であった。Zabare こそは教育の根柢であった。

彼等は教育一般を重視したが、決して特殊な階級のためのものではなかった。万人に平等に与えられなければならない。したがって無視されがちな婦人の教育を、とりわけ強調したようにみえる。真実の愛は、教養ある男女の独立した人格の間でのみ可能であり、良き家庭や子弟の養育に、婦人の教養の果す役割の大きなことをヒューマニストたちは指摘した。

著者ホグリーフが、全篇を通じて描きだしたモア・サークルの人

々の改革案の理念を述べてみたが、その面からの説明では洩れてしまった個々の人物やその動きを、この書物から紹介してイギリス・ルネサンスの肉づけをしておきたい。

III

自然や自然法の尊重は、自然科学への関心となつて現われている。医学における Linacre によるガレノスの翻訳(二五二七—二四)は高く評価されているが、彼によってロンドンに創設された医科大学の貢献も見落せない。モアも医学を奨励し、その影響で R. Herd や J. Clement がこの道に進んでいる。啓蒙書にとどまるとはいへ、Sir T. Elyot が 'Castle of Health (一五三九)' を書いているのも注意をひく。天文学も彼等の興味をそつたが、占星術はその厳しく斥けるところであった。ここでもモア、リナカーの名があげられるが、モアの義弟 John Rastell は、天文学の知識を、彼の好きな芝居の舞台装置にふんだんに盛りこんだと伝えられるし、例の 'The Field of Cloth of Gold' の準備を委された彼は、そのような意匠をとりいれるのに苦心した。彼の天文学への興味は、地理学へもつながっていた。彼自身、船をしたてて新大陸への渡航を一五一七年に企てたが、失敗に帰した。当時の一般はもちろんのことモア・グループにあつても異例な関心であった。この分野で忘れてならぬのは、G. Tunstall の 'De arte supputandi (1522)' の出版である。英語による最初の算術であり、その序文はモア宛の

手紙になつてゐる。このような自然への礼讃は、自然の楽しみや人体の美しさが美德に一致するという信念にもとづくものであった。

次に 'True Nobility' については、モア・グループの反貴族主義的な見解が支持されやすい事情が、バラ戦争による騎士階級の崩壊に認められよう。一方モア・グループの若い世代の中には、再び貴族主義的な見解をとる T. Elyot や R. Ascham が現われる。テュードル王朝の安定が反映しているとみてよからう。

宗教上の改革が本書で取扱われるのは、宗教改革の影響を受けないう範囲であるから、主としてそれは Colet, Grocyu, More 等による清新な説教活動と Erasmus の聖書註解に協力する Lupset や Tunstall の仕事があげられる。その結果、ケンブリッジとオックスフォードの両大学にギリシャ語の講座が正式にひらかれる。

法と政治の問題では、モア・グループの中にもやはり見解の相違がみられる点がある。一つは戦争に対する態度で、More, Colet, Erasmus, Vives が、自然にさからう不道徳なものとして戦争を否定するのに対し、Pole, Elyot, Ascham が戦争にそなえる訓練の必要を主張する。ここにも時代の変遷が投影されていると考へるべきではなからうか。第二は、ローマ法の採用を望む人々——Pole, Erasmus, Vives と英国固有のコモン・ローを支持する人々——More, Rastell の対立である。ここには大陸で教育を受けた人々とそうでない人々の相違が現われているといえよう。第三に、財産の共有について Erasmus, More の賛成派と Elyot が反対

派がみられる。しかし、法律をもっと簡単に分りやすく、そして民衆に親しみのある母国語で表現したいという主張では誰もが一致した。

教育の推進は、彼等の最も活躍した面である。モア・グループの人々は、いずれも自ら教育家をもつて任じていたとみてよいし、その著作の多くは、新しい教育改革案を提出しているものであった。

モアは、新しい教育を実行に移すため、その家庭をあたかも学園たらしめた。有能な家庭教師を招き、自分の子女だけでなく知友の子弟を集めて、古典教育を受けた。一五二〇年から二〇年代にかけて行なわれたが、Margaret Roper, Margaret Gigs, William Roper, のすべれた成果が生まれただけでなく、それを機会に若き教師たち William Gonnell, Nicholas Kratzer, R. Herd, John Clement がモアの交渉を深めたわけである。Colet の St. Paul's School 創立の意義は高く評価されることであるけれども、Erasmus, More, Linacre, Lily, Pace が美しい協力を惜しまなかつたことも見落せない。そして彼等は、若きヒューマニストたちの研究を、経済的にも精神的にも熱心に援助したとみられる。尚一五〇〇年頃まで、ギリシャ語研究の中心であったオックスフォードに代つて、ケンブリッジが漸くギリシャ学、バイブル研究の花をひらくに至るが、それは Erasmus の影響を受けた John Fisher が St. John's College を創設したことによつてもたらされたもので、John Cheke や Ascham の顔ぶれがここから輩出するのである。

たのをうかがうことができよう。

IV

モア・グループと戯曲との関係が、疑問として残る。モアが少年時代あずけられていた Morton の屋敷で、一四九〇年から一五〇〇年の間に、食客をしていた Henry Medwall が自作「Nature', 'Fulgens and Lucretia」を上演しているのは、モアも承知していると思われる。モア自身も戯曲に興味があったせいか、作品がドラマティックな要素に富んでいる。モアの義弟 John Rastell は、モア・グループの有力な一人であるが、彼は戯曲を自作、上演しているばかりでなく自前で野外劇場も作っているほどであり、また他の劇作家の作品を出版している。彼の子供になる William Rastell も、戯曲の刊行を好んでしている。第二部でとりあげた戯曲は以上の四点のどこかで、モア・グループとつながりのある作品ばかりである。だがそれらが当時の戯曲のなかでどのような比重を占めていたかが明確にされなければ、彼等の理念の戯曲への影響をはかることはできない。著者の興味は、戯曲にあるという理由だけでならぬ。モア・グループにとって演劇のもつ意味をもっと具体的に明らかにしなければ、著者の意図は結局不明になってしまうのを免れない。

モア・グループが生まれるには、その生まれるにふさわしい背景があったと思われるにもかかわらず、断片的に中流階級の商人の婦

最後に婦人の教育にふれるが、この時代以前には、中流や下層の女子が教育をうける機会がなかったのはもちろんのこと、上層の女子教育といっても、それは名流家庭へ家事見習いにやるにすぎなかった。ラテン語やギリシヤ語を習わせた様子は全くない。また女子教育書も、衣服、名譽、つつしみ、従順を説くものにすぎなかった。ところが十六世紀に入って、婦人教育に急激な進歩が現われる。その所謂原因には、聖母マリア崇拜とか、中世騎士道の婦人尊敬とか色々あげられ、またギリシヤ古典とりわけプラトンの影響が考えられるが、必ずしも充分に説明するものではない。だが、ここにトマス・モアの婦人教育への影響が、実質的に絶大であったことを見過してはならぬ。この頃、有力な七つの婦人教育論が現われているけれども、その最も早くかれ、かつ優れたのは、モアが家庭教師 W. Gonell にあて娘の教育について認めた書簡(一五一八)である。それが他の教育論の見本となったといっても過言ではない。次に、モア家の家庭学園は偶然にもせよ、モアの娘三人、養女二人、姪そのほかという具合に婦人の顔ぶれが多かった。その中から教養ある婦人が育ってきたのをみて、上流階級にそれを見習って婦人教育を真剣に考える人が現われた。その風潮を一層押し進めるのに、ヘンリー八世の二人の学識高い王妃 Catherine of Aragon と Catherine Parr が与って力あった。前者は王女 Mary の教育に Vives をあたらせ、後者は王女 Elizabeth のため R. Ascham を家庭教師にえらんだ。古典的な教養が、男子と同様に婦人教育にもとり入れられてき

人の古典的教養をもった例を指摘をしながら、その支えとなっている彼等の盛りあがりつつある経済力、ひいては政治力に目をそそぐうとしないのが惜しまれる。

この点と関連することであるが、法律論の中でローマ法支持者とコモン・ローを支持するモアらの立場に分れることを論じてはいるけれども、モアの立場がコモン・ローを通して深く英国の商人階級と結びついている事情に立ち入ろうとはしないところにも、この書物の接近方法に限界を感じる。そのために、モア・グループの社会改革案が、ことさらに教育改革案の色彩を濃くしているものにみえ

る結果になっていないであろうか。

宗教改革にまきこまれたモア・グループの人々を扱おうと試みていないのは、純粹にルネサンスの面のみを明らかにするには好都合であるが、他面分析が平板に終わった嫌いがある。宗教改革のあおりをくった彼等のあり方を、次の段階には導入すべきであり、それによつてイギリス・ルネサンスの成行きが立体的にとらえられるであろう。

——一九六〇・一一・二二—— (渡辺和一郎)